

山宿年表

明治以降

												明治 年号	西暦	西下町	西上町	東下町	出丸町	大工町	東上町
一八七一	一八六六	一八六五	一八六四	一八六三	一八六二	一八六一	一八七九	一八七七	一八七六	一八七五	一八七四	一八七三	一八七二	一八七一	一八六九	一八六八	（孝明天皇慶應二年一二月二十五日（一八六七年一月三〇日）崩御（三六才）服喪期間 中につき曳山なし。）		
乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰		
一一一〇	一一〇九	一一〇八	一一〇七	一一〇六	一一〇五	一一〇四	一一〇三	一一〇二	一一〇一	一一〇〇	一一〇一	一一〇〇	一一〇九	一一〇八	一一〇七	一一〇六	一一〇五		
山村	北崎	高田	大瀬	山本	富井	笹井	石崎	岡部	小竹	彦右衛門	松島	高瀬屋	北野屋	松尾屋	安右衛門	野屋			
町内山番	十右衛門	新七	甚三郎	彦助	吉助	平作	和吉	長助	彦右衛門	又十郎	又十郎	左衛門	安右衛門	平右衛門	右衛門	（飢饉年につき山曳かず、庵は出す）			
石村	大田	田村	土井	溝口	丸川	大岡	小兵衛	左平	佐平次	吉左衛門	大田	丸岡	宮岡	（飾山）与八郎	（飾山）次左衛門				
崎新兵衛宅	十右衛門	新七	甚三郎	彦助	吉助	平作	和吉	長助	彦右衛門	又十郎	原理	吉左衛門	宇兵衛	（飾山）与八郎	（飾山）次左衛門				
野村	大田	田村	土井	溝口	丸川	大岡	小兵衛	左平	佐平次	吉左衛門	久左衛門	宮岡	宇兵衛	（飾山）与八郎	（飾山）次左衛門				
町内山番	小兵衛宅	甚三郎	吉助	平作	和吉	平作	和吉	長谷川	佐平次	吉左衛門	久左衛門	吉左衛門	宇兵衛	（飾山）与八郎	（飾山）次左衛門				
最住	吉右衛門																		
荒木文平	宮永	宮吉	田川	千田	藤井	宮岡	長谷川	千川	大田	吉左衛門	久左衛門	吉左衛門	宇兵衛	（飾山）与八郎	（飾山）次左衛門				
	文平	吉村	吉村	宗右衛門	善右衛門	伊三郎	伊三郎	伊三郎	大田	吉左衛門	吉左衛門	吉左衛門	宇兵衛	（飾山）与八郎	（飾山）次左衛門				

山宿年表

		明治												
		一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	
丙午	乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	丁亥	丙戌	乙未	丙申	丁酉	
一九〇六	一九〇五	一九〇四	一九〇三	一九〇二	一九〇一	一九〇〇	一九〇〇	一九〇一	一九〇一	一九〇一	一八九五	一八九六	一八九七	
金田卯一郎	澤田與姫郎	井田精一宅 <small>(日露戦争中につき曳山祭中止)</small>	田中為次郎	堀川理吉三	松田栄藏	田尻外吉郎宅	内山田	内山堀	内山松	内山田	中川甚太郎	大井喜一郎	丸川栄藏	舟見磯右衛門
吉村甚右衛門	澤田	篠井萬三郎	岡部宇右衛門	篠井喜一郎	篠井萬三郎	西村甚太郎	新右衛門	岩崎清右衛門	中川文蔵	伊次郎	岸林	岸林	岸澤田	岸千原和三郎
松嶋栄作	崎丈太郎宅	井口作藏 <small>(日露戦争のため、曳山なし。各</small>	谷口豊平	谷口豊平	谷口豊平	谷波庄太郎	最住清右衛門	洲崎永之助	泉川栄藏	与右衛門	左衛門	左衛門	左衛門	岸松崎弥亮
井口作藏	栗山新右衛門	伊藤勝左衛門	池田藤太郎	池田藤太郎	池田藤太郎	田久太郎	北林権次郎	小原惣市	田川久太郎	岸村井弥三郎	岸村井弥三郎	岸村井弥三郎	岸森崎弥亮	岸森崎弥亮
		米原平右衛門	米原平右衛門	米原平右衛門	米原平右衛門	米原平右衛門	北林小兵衛	小原惣市	田川久太郎	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門
		栗山久次郎	栗山久次郎	栗山久次郎	栗山久次郎	栗山久次郎	北林久次郎	小原惣市	田川久太郎	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門	伊藤勝左衛門

山宿年表

					</td																							

山宿年表

												昭和						
三	二	二〇	一九	一八	一七	一六	五	四	三	二	一〇	九	八	七	六	五	四	己巳
丁亥	丙戌	乙酉	甲申	癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	辛未	庚午	一九二九
一九四七	一九四六	一九四五	一九四四	一九四三	一九四二	一九四一	一九四〇	一九三九	一九三八	一九三七	一九三六	一九三五	一九三四	一九三三	一九三二	一九三一	一九三〇	一九二九
相地善太	山本憲孝	松井藤次郎宅	町内山番	金田卯一郎宅	町内山番	荒木常太郎	木良之助	坂川理吉三宅	町内山番	石崎庄太郎	健常次郎	田卯一郎	增善藏	藤川理吉三	大井助次郎	松島常次郎	广田与亟	矢部富之助
中川文平	宮本次吉宅	野村淳宅	町内山番	野村淳宅	町内山番	片山才一郎	山村外代雄	野村順宅	町内山番	野村匡助宅	野村加平治	山村次吉	田下清治	田中禮造	山南幸次郎	有川小太郎	川嶋幸次郎	矢部富之助
杉本幸作	竹部幸作	藤沢太四郎	町内山番	太田栄一郎	吉村甚右衛門宅	高井栄松	日野静夫宅	野村理太郎宅	町内山番	吉村多喜雄宅	吉村甚右衛門	橋本助太郎	大西他八郎	岡田利吉郎	谷井多喜雄	鳴谷利吉郎	松谷要吉	松平恒次郎
中村辰次郎	瀬川理一郎	泉州理市宅	町内山番	岩崎米次郎宅	岸孜宅	洲岸	崎折哲二	田代左太郎	町内山番	芳里富義宅	川代源治	田代弥一郎	西岩渕理吉郎	崎哲二	洲崎哲二	川崎哲二	大鋸與吉	庄田作次郎
野村理兵衛	松嶋栄作	山村理兵衛宅	町内山番	金田健治宅	野村理兵衛宅	細川中谷	中谷宗次郎	杉井文次郎	町内山番	杉井理兵衛宅	井文次郎	長田常吉	田文藏	井文藏	中谷喜市郎	谷常吉	島常蔵	谷口孝一
中田勝藏	伊藤正信	岸修二	町内山番	宮岡周三郎宅	宮岡宇平次宅	中川外男	伊藤正信	杉本幸作	町内山番	土山他三郎	岡周三郎	岡周三郎	岡周三郎	岡周三郎	岡周三郎	岡周三郎	岡周三郎	山下清之

山宿年表

四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
戊申		丁未		丙午		乙巳		甲辰		癸卯		壬寅		辛丑		庚子		己亥		戊戌		丁酉		丙申		乙未		甲午		癸巳		壬辰		辛卯		庚寅		己丑		戊子	
一九六八		一九六七		一九六六		一九六五		一九六四		一九六三		一九六二		一九六一		一九五六〇		一九五九		一九五八		一九五七		一九五六		一九五四		一九五三		一九五二		一九五一		一九四五〇		一九四九					
高木義雄		石崎正二		安谷文伸		藤井伸		鳴辰		富榮		田太郎		沢泰		米金治郎		桜井		池辰		山清藏		山伊三郎		今兼嗣		井英三		酒文之助		野友次郎		松佐竹		本初太郎		谷辰一郎		最勝太郎	
清部篤次		天富直次		天富直次		天富直次		天富直次		天富直次		天富直次		天富直次		森井利藏		井井村																							
末永勝平		木村辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次		木出辰次																			
河合豊市		洲崎丸		柄折次		小原元		原公		原公		原公		原公		原公		原公		原公		原公		原公		原公		原公													
中谷庄治		山本吉		山本吉		山本吉		山本吉		山本吉		山本吉		山本吉		山本吉		山本吉		山本吉																					
長田二吉		杉井範吉		伊藤克夫		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一		伊藤忠一																	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四		二三	
四三		四二		四一		四〇		三九		三八		三七		三六		三四		三五		三六		三三		三二		三〇		二九		二八		二七		二六		二五		二四			

山宿年表

昭和

五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四

丁巳 丙辰 乙卯 甲寅 癸丑 壬子 辛亥 庚戌 己酉

一九七七 一九七六 一九七五 一九七四 一九七三 一九七二 一九七一 一九七〇 一九六九

長谷川 金島野村藤上和細松経田

文重 雄実 豊次 一平直之

雄之 雄実 大長谷藤勇梅山松

下上西川田崎本原

重義正 仁太郎庄理富慶平一郎

之堯重松杉嶋牧溝松平谷

平良幸文喜正理喜一郎重

雄治雄一平哲定三誠鐵善

繁永治夫一男治館次治

松盛石谷佐稻中金山

嶋田崎藤場川田本

外茂作弘喜貞辰順榮

宮吉正安越佐賢太郎

雄三彦市

城端曳山史年表

年号	干支	西暦	項
大宝二	壬寅	七〇二	越中の二字、初めて正史にあらわれる。
和銅三	庚戌	七一〇	越中國砺波郡川上里から腊一斗五升を貢納する。
天平一八	丙戌	七四六	大伴家持越中守として来任。在任六年間。その頃の城端地方は河上（加波加美）と呼ばれていた。
大同二	丁亥	八〇七	この頃から延喜一〇年（九一〇）にかけて、砺波郡川上村に官倉の存在したことが記録されている。
承暦二	戊午	一〇七八	これより以前、石黒莊が仁和寺に施入する。
承久二	癸卯	一一八三	源義仲越後から越中に入る。これに河上氏參す。
壽永二	甲子	一二〇四	源頼家山田郷に地頭補任、仁和寺の抗議により停止される。
元久元	辛巳	一二三一	河上氏・石黒氏共に京方に属し敗れる。
延応元	己亥	一二三九	誓願房心定が越中國細野で阿聖より立川流の教旨を受法する。
弘安二	癸未	一二八三	仁和寺菩提院了遍、石黒莊の山田・弘瀬郷を禪助法印に譲る。
興國六	丙戌	一二八六	石黒莊内直海郷に対する伊勢外宮造當の役夫工米宛課が免除される。
同二	辛巳	一二三四一	南朝、大光寺郷を侍従房弁祐に与える。南朝の畠時能、越前鷺ヶ峰で戦死、その一族越中五か山に入り、その後、砺波郡大鋸屋に移住したと伝える。
同三	壬午	一二三四二	宗良親王・越後より越中へ入国。
正平五	庚寅	一二三五〇	桃井直常・井口城に北朝方の將鹿草出羽守を攻めてこれを破る。これより正平二〇年頃までこの地方は南北両朝争奪戦の渦中にあり、城端地方は徹頭徹尾南朝方に属す。
明徳元	庚午	一二三九〇	本願寺五代綽如、井波に瑞泉寺を創立。野田新田に小社を建立。これが西新田神明社の前身とい

城端曳山史年表

文安	甲子	一四四四	綽如の曾孫蓮真・加賀河北郡井家荘砂子坂に住む。これが善徳寺の発祥で、文安二年ともいう。
寛正	壬午	一四五二	鷹司家より直海、大光寺両郷の年貢の内三〇貫文を僧清承に下付。
応仁	丁亥	一四六七	鷹司家、直海・大光寺両郷を質入、三〇貫文を借錢。この年、応仁の乱始まる。
文明	辛卯	一四七一	その頃、本願寺八代蓮如砂子坂を訪れ一寺を建て、蓮如に付属させる。これを善徳寺の始まりとし、第一世蓮如・第二世蓮貞とする。蓮如に隨行の佐々木入道祐玄が越前より砺波郡梅原村に来住したと伝える。
~	~	~	う。
文安	壬午	一四七五	この春、福光城主石黒右近光義、富権政親に党し、一向一揆と戦い山田川畔田屋河原で敗れる。
寛正	甲子	一四八一	六月、加賀・越中の一向宗徒、富権政親を高尾城に攻め、政親敗死す。
応仁	壬午	一四八八	善徳寺第三世実円のとき、砂子坂より越中石黒莊法林寺へ、さらに山本村へ移る。善徳寺の号は、この代に、本願寺九代実如より与えられたともいう。
文明	丁亥	一五〇一	將軍足利義晴と本願寺の和睦を祝し、河上千郷より本願寺へ八〇貫文の祝儀を進上。
~	~	一五〇一	善徳寺第四世円勝が子息尊千代を本願寺に上せ、ついで本願寺一〇代証如により得度をうけ、その法名を祐勝（善徳寺第五世）とする。その頃、善徳寺は山本村より福光に移る。
天正	同二〇	一五三七	「城端善徳寺由緒略書」には、この年に善徳寺が城端城主荒木太膳の招請で福光村より所蔵する。
元亀	同二〇	一五五九	「色紙和讃」開版。この時の色紙和讃で今に残るもの。その一を善徳寺に所蔵する。
永禄	二	一五五九	「城端善徳寺由緒略書」には、この年に善徳寺が城端城主荒木太膳の招請で福光村より城ヶ端へ移住したとある。このとき真覚寺も山本村より城端へ移転。
元亀	元	一五七〇	一〇月、石山本願寺が織田信長に対抗、石山戦争が始まる。
天正	元	一五七二	この年に城端開町の説もある。
同	三	一五七三	城端開町。「善徳寺由來」には、この年に国主荒木太夫の命により福光から城端へ善徳寺が移転したとある。山田の市（四の日）、井口の市（十の日）が移転、城端の上町の市が開設される。佐々木祐玄の曾孫又兵衛（之綱）が城端に移住。畠治五右衛門（好水）が大鋸屋より城端へ移住した。この年、室町幕府滅亡。

城端曳山史年表

同	寛文	明暦	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	元和	慶長
五	五	四	承応	同	同	同	正保	同	同	同	同	同	同	同	三	九	一五
乙巳	乙巳	丙申	甲辰	丙申	甲午	辛卯	己丑	丁亥	乙酉	甲申	癸未	壬午	己卯	丁丑	丙子	癸亥	庚戌
一六六五	一六六五	一六五六	一六五四	一六四五	一六四五	一六四五	一六四五	一六四五	一六四五	一六四五	一六四五	一六四五	一六三七	一六二六	一六一〇	一六一〇	れる。
前田家四代光高襲封。利次を富山に、利治を大聖寺に分封。 島田七郎兵衛の二人が任命される。三月に塗師屋初代又兵衛（之綱）死去八七才。 代官に加藤新右衛門。この年に城端町が今石動町奉行の支配下におかれる。一説に寛永一七年ともいいう。町奉行は篠嶋豊前清長。	前田家四代光高襲封。利次を富山に、利治を大聖寺に分封。 島田七郎兵衛の二人が任命される。三月に塗師屋初代又兵衛（之綱）死去八七才。 代官に加藤新右衛門。この年に城端町が今石動町奉行の支配下におかれる。一説に寛永一七年ともいいう。町奉行は篠嶋豊前清長。	西新田町立。城国寺、法乗寺（法はもと宝の字、元禄年中より法に改める）建立。 東新田町開立。教念寺、瑞泉寺建立。	西新田町立。城国寺、法乗寺（法はもと宝の字、元禄年中より法に改める）建立。 東新田町開立。教念寺、瑞泉寺建立。	塗師屋（三代）徳左衛門が畠治五右衛門の子孫宜安より唐人伝来の密陀僧の秘法を伝授される。 徳左衛門これにもとづき白漆蒔絵の名をもつて世に広める。畠氏はこれより医を業とし桜井氏を称する。	塗師屋（三代）徳左衛門が畠治五右衛門の子孫宜安より唐人伝来の密陀僧の秘法を伝授される。 徳左衛門これにもとづき白漆蒔絵の名をもつて世に広める。畠氏はこれより医を業とし桜井氏を称する。	前田綱紀七月一〇日城端へ来町。七月二三日二俣越えで帰る。宿は黒田屋。町奉行篠嶋豊前清次 この年に淨念寺が砺波郡鹿島村より城端へ移転。 初めて町年寄が任命される。黒田屋与次兵衛、絹屋庄兵衛等五人。一説に寛文六年正月からとも	前田綱紀七月一〇日城端へ来町。七月二三日二俣越えで帰る。宿は黒田屋。町奉行篠嶋豊前清次 この年に淨念寺が砺波郡鹿島村より城端へ移転。 初めて町年寄が任命される。黒田屋与次兵衛、絹屋庄兵衛等五人。一説に寛文六年正月からとも	絹判賃銀が定められる。	絹判賃銀が定められる。	四月一〇日より城端宿並の定めあり、代官は九里九郎兵衛。この年、町肝煎に吉田屋藤右衛門、島田七郎兵衛の二人が任命される。三月に塗師屋初代又兵衛（之綱）死去八七才。 代官に加藤新右衛門。この年に城端町が今石動町奉行の支配下におかれる。一説に寛永一七年ともいいう。町奉行は篠嶋豊前清長。	四月一〇日より城端宿並の定めあり、代官は九里九郎兵衛。この年、町肝煎に吉田屋藤右衛門、島田七郎兵衛の二人が任命される。三月に塗師屋初代又兵衛（之綱）死去八七才。 代官に加藤新右衛門。この年に城端町が今石動町奉行の支配下におかれる。一説に寛永一七年ともいいう。町奉行は篠嶋豊前清長。	三月に大火があり、下町の市は一時退転。	三月に大火があり、下町の市は一時退転。	この年に高岡の曳山車が創始されたと伝える。	この年に高岡の曳山車が創始されたと伝える。		

同	同	同	同	正徳	同	同	宝永	同	同	同	同	同	同	元祿	同	貞享	天和	元	延宝	同	寛文
五	三	二	一	元	七	四	元	八	六	一	二	三	一	五	元	三	二	四	一〇	八	
乙未	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	丁亥	甲申	辛巳	己卯	乙亥	癸酉	壬申	丙寅	戊辰	辛酉	乙丑	丙辰	庚戌	戊申	一六六八	一六六八	
一七一五	一七一二	一七一二	一七一一	一七〇一	一七〇四	一七〇七	一七〇七	一六九九	一六九五	一六九三	一六九二	一六八六	一六八八	一六八一	一六八五	一六八五	一六七六	一六七〇	一六六八	一六六八	
四月、東新田町に大火、六三軒を焼く。五月、金戸村專徳寺焼失。	砺波郡大西村に農民騒動が起きる。	三月、城ヶ端氏子神明宮へ石燈籠を寄進。	町奉行に篠島主馬清英が就任。	蕉門十哲の一人東花坊支考来町。善徳寺で納涼句会を開く。「東西夜話」を作る。	絹押判人と布押判人が兼任で置かれるようになる。	富山の山王祭に曳山九本ありといふ。	巡見上使來町。町奉行に塙川安左衛門が就任。	八月、初めて糸綱仲人肝煎が任命される。	野村海乘寺の甥山伏常専が神明宮守となる。	切高仕法発令。七月、「組中人々前品々覚書帳」成る。戸数六八六、人口三八〇九人。	神明宮に加賀藩祐筆山本源右衛門筆の「大神宮」の額ができる。放生津の曳山創始と伝える。北	城端下町の市が復興。	塗師屋(二代)六右衛門(達伸)死去。八〇才。	幕府の巡見上使來町。天和年間に京都の近岡氏が神明宮へ「坂上田村麿蝦夷征伐」の絵額を奉納。	城端神明宮の社殿再建。この年前田綱紀が京都の東寺に百合の書函を寄進。	城端下町の市が復興。	善徳寺の追手門建立。文政年間に砺波郡苗加村の万福寺へ譲渡。(富山県文化財指定)加賀藩に盜賊改方設置。元祿年間に前田綱紀の「百工比照」が成り、城端塗がその選に入る。	いう。	初めて算用賃が任命される。荻田屋万右衛門。	改作法の例外として五ヶ山への貸付が認められる。	

城端曳山史年表

年号	干支	西暦	中央・地方	事	頃
享保元	丙申	一七二六	八代將軍吉宗就任。	祭礼・曳山	郷土
同	同	一七二七	六代前田吉徳襲封。 町奉行に山崎九郎右衛門が就任。	西下町堯王像出来。作者木屋五郎右衛門 (木屋仙人ともいう)	
元文	元	一七二八	山祭開始)	八月、曳山出来。春日神輿出来。装束踊 あり。	
五三	元	一九一八	八月、町奉行山崎九郎右衛門が曳山祭に 来町。町奉行の指示で翌年より祭礼曳山 を中止。	出丸町曳山・高砂山出来。	
庚申	丙辰	甲寅	一七二九	上町の市が復興。城端の戸数 七八五、人口四〇二二。	塗師屋四代亮好死去。七四才
一七三四〇	一七三六	一七三三	この年、貸米四四〇石あり。 練屋懸機仲人が任命される。 荒木和助生まる。	針口懸座、絹頭を任命。善徳寺 第一二世に速満院真源入寺。	
一七三八	金沢町に大火あり	三清組の騒動起ころる。	善徳寺一二世至徳院真誓入寺 塗師屋五代貞好死去、七三才		
神明宮の社額(縦額)寄進される。	城端神明社に神輿堂ができる。				

同	同	同	同	同	同	宝曆	寛延	同	同	同	延享	同	寛保
一〇九	七六	五四三	二三元	四	三	二	三	四	三	二	元	二	元
庚辰 己卯	丁丑 丙子	甲戌 乙亥	癸酉 庚午	壬申	戊辰 庚午	丁卯	内寅	辛酉 壬戌	乙丑	甲子 王戌	乙丑	辛酉 一七四一	一七四一
一七五九 一七六〇	一七五六 一七五七	一七五四 一七五五	一七五三 一七五四	一七五二 一七五三	一七四五〇 一七五〇	一七四八 一七四五	一七四七	一七四五 一七四五	一七四五六	一七四五 一七四五	一七四五 一七四五	一七四二 一七四二	八尾町の曳山祭始まる 町奉行に富田次太夫
町奉行に武田判太夫。	金沢町大火一万戸焼失	端騒動(北市騒動)	四月より銀札くずれ。 町奉行に金森多門。城	町奉行に不破忠太夫 今石勤御坊町の曳山が 城端大工町で製作。	大槻朝元五ヶ山へ流刑	八代前田重熙襲封。 町奉行に前田源五左衛門	東下町の黒大黒御面像箱絵ができる。	善徳寺本堂の斬始め。野下町、 今町火事、二七軒類焼。	西下町に火事、一〇軒焼失。	その頃、善徳寺一四世欣求院 真勝	善徳寺御堂再建の石突amar 端騒動関係者の処罰。	善徳寺御堂の上棟式。	善徳寺御堂の上棟式。

城端曳山史年表

同	同	安永	同	同	同	明和	同	同
四	三	二	四	八	三	二	二	二
乙未	甲午	癸巳	辛卯	丁亥	丙戌	乙酉	壬午	辛巳
一七七五	一七七四	一七七三	一七七一	一七六七	一七六六	一七六五	一七六二	一七六一
町奉行に前田数馬就任。 曳山車訴訟の取調べが	東上町寿老像出来、唐津屋和助四〇才。 東上町庵屋台原型出来、七代目治五右衛門四五才。	西新田町に火事、九軒類焼。 五月善徳寺鐘楼再建の釘始め 六月より殿村屋（唐津屋）和助、柴焼を作り始め五牛と号す。水月庵建立。塗師屋六代忠好死去。六八才。	出丸町の曳山の地山が坂の下へ落ちて、町中の大工が出て修理したと伝える。 出丸町の布袋山出来。この年に布袋像も出来たと考えられる。唐津屋和助二九才の作。	井波大火、瑞泉寺類焼 出来たと考えられる。唐津屋和助二九才の作。	巡見上使來町。			
一月曳山車訴訟起こり、一二月に塗師屋治五右衛門等七名、魚津の改方役所へ	四月、東下町大黒天像出来。和助四一才。 東下町宝槌出来。	善徳寺一五世横超院真央（含山）入寺。出丸町延命地蔵建	李夫が城国寺境内に芭蕉養毛塚を建てる。	出丸町の曳山の地山が坂の下へ落ちて、町中の大工が出て修理したと伝える。 出丸町の布袋山出来。この年に布袋像も出来たと考えられる。唐津屋和助二九才の作。	井波大火、瑞泉寺類焼 出来たと考えられる。唐津屋和助二九才の作。	巡見上使來町。		

城端曳山史年表

寛政 七 乙卯	同 一〇 戊午	同 一一 己未	同 一二 庚申	享和 一七九五 成。	文化 一七九六 西村太冲明倫堂に出仕	同 一七九八 東下町曳山後屏「陶淵明酴醿渡釀ノ図」 を入れる高欄ができる。	同 一七九九 西村奉行に井上勘右衛門	同 一八〇〇 町奉行に高畠五郎兵衛	同 一八〇一 町奉行に奥村源左衛門	同 一八〇二 町奉行に篠原頼母。 改作方復古に関する趣旨を公示。	同 一八〇三 出丸町の脇人形、旗持童子の箱を改め、 笛吹童子も改める。	同 一八〇四 東下町黒大黒の小槌出来。	同 一八〇五 神明宮神輿新調、八代治五右衛門宗好(一 白)春日宮神輿修復。	同 一八〇六 神明宮神輿新調、八代治五右衛門宗好(一 白)春日宮神輿修復。	同 一八〇七 神明社の八幡神輿建立。	同 一八〇八 大工町の関羽・周倉像出来。和助六三才。 西上町の恵比須像出来。唐津屋和助六二 才。	同 一八〇九 塗師屋七代稀雄死去、七七才。 「白花集」を編纂。唐津屋和 助死去、七三才。	同 一八一〇 善徳寺山門上棟式。天井絵「天 人舞樂の図」荒木春栄作。	同 一八一一 四月一七日、城端大火。	同 一八一二 小原一白が水月庵境内に蓮子塚を建立。	同 一八一三 有沢東海福光で死去、五六才
丙子 乙亥	癸酉 壬申	庚午 己巳	丁卯 丙寅	辛酉 癸亥	甲子 乙丑	一七八〇 一八〇三 一八〇四 一八〇五 一八〇六 一八〇七 一八〇八 一八〇九 一八一〇 一八一一 一八一二 一八一三 一八一四 一八一五 一八一六	町奉行に井上勘右衛門 町奉行に高畠五郎兵衛 町奉行に奥村源左衛門	町奉行に井上勘右衛門 町奉行に高畠五郎兵衛 町奉行に奥村源左衛門	出丸町の脇人形、旗持童子の箱を改め、 笛吹童子も改める。	東下町黒大黒の小槌出来。	神明宮神輿新調、八代治五右衛門宗好(一 白)春日宮神輿修復。	塗師屋七代稀雄死去、七七才。 「白花集」を編纂。唐津屋和 助死去、七三才。	善徳寺山門上棟式。天井絵「天 人舞樂の図」荒木春栄作。	四月一七日、城端大火。	小原一白が水月庵境内に蓮子塚を建立。	有沢東海福光で死去、五六才					
町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任	町奉行に富田外記就任				

城端曳山史年表

城端曳山史年表

城端曳山史年表

同	文久	万延	同	同	同	安政	同	同	同	嘉永
三	二	元	六	五	三	元	六	五	四	三
癸亥	壬戌	庚申	己未	戊午	丙辰	乙卯	甲寅	癸丑	壬子	庚戌
一八六三	一八六二	一八六〇	一八五九	一八五八	一八五五	一八五四	一八五四	一八五三	一八五一	一八五〇
町奉行に前田内蔵太、屋台出来。	桜田門外の変。	コレラ流行、福光に庵	各地に打ちこわし。	前年につづきコレラ流行。ロシア船出没。	藩主前田斉泰来町、善徳寺に一泊。町奉行に遠田勘右衛門、殿様益	株仲間再興	黒羽織党政権失脚。	ペリー来航。	加賀藩海防に着手。	任。
大工町曳山の地山幕新調（現在も使用）。	東上町曳山屋根まわり再調。	祭礼を閏八月一五日に延期。神明社に常夜燈の寄進あり。	東下町曳山の屋根再製。衣裳長持、御面像、小木偶箱など六個改む。曳山祭再開	像、小木偶箱など六個改む。曳山祭再開	曳山行わず。神明宮大鳥居建つ。扁額は久我通久書。画工岡部再有「義経と弁慶」絵額、画工雪隣「龍」絵額が奉納される。藩主来町のとき、寺社与力が神明社へ御初穂を奉納。この年も曳山行わず。	曳山行わず。曳山行わざ。	曳山行わざ。曳山行わざ。	曳山行わざ。	曳山行わざ。	曳山行わざ。
その頃、善徳寺住職は第一七	三才。	地震のため瑞泉寺が宗林寺町より野下町へ移転。	水月庵で若衆の手踊物真似興行。塗師屋九代雄藏死去、七	絹方御取扱銀裁許に池田勘助、糸屋市左衛門が任命される。善徳寺玄関門の上棟式。	一月、城端絹会所建つ。	綱方御取扱銀裁許に池田勘助、糸屋市左衛門が任命される。善徳寺玄関門の上棟式。	天明宮で祭神音公九五〇年祭を執行。	亮丸殿死去、四才。	二月一九日、城端大火。	拝殿の造営成る。

城端曳山史年表

元治	慶応	同	明治	同	同	同	同	同	同	同	同	同
元	元	五	元	三	二	元	三	二	丙寅	乙丑	一八六五	一八六四
甲子		壬申	辛未	庚午	己巳	戊辰	丁卯	丙寅			一八六六	
		一八七二	一八七一	一八七〇	一八六九	一八六八	一八六七	一八六六	月に伊藤平左衛門就任	町奉行、七月に不破京	二郎、藤懸床太郎、八	前田式部（二人制）
									五代将軍徳川慶喜。	四代前田慶寧襲封。	月に矢部順平就任。	二月、前田式部に替り生駒勘右衛門が町奉行
									大政奉還、王政復古。	三月神仏分離令出る。	前田家若御前卒去につき曳山祭行わす。	前田宮再建の遷座式。
									六月、版籍奉還を許す	九月に明治改元。		
									新川郡にばんどり騒動	大教宣布の詔勅出る。		
									大教宣布の詔勅出る。	六月、版籍奉還を許す		
									善徳寺の治姫様（前田家息女）	八月一七		
									東上町曳山の天井完成。	東上町曳山を出さず、飾り山のみ。		
									飢餓のため曳山を出さず、飾り山のみ。	諒闇のため曳山を出さず、飾り山のみ。		
									端神明社が村社に列す。	凶作のため曳山を出さず、飾り山のみ。		
									日酉の時まで延ばす。	端神明社が村社に列す。		
									善徳寺の治姫様（前田家息女）	八月一七		
									金沢市に屬す。一月	金沢市に屬す。一月		
									新川県に属す。	新川県に属す。		
									彫刻に塗漆、塗箔。	城端町に新川県砺波郡一区の		
									学制發布。太陽暦採用	区会所設置。郵便取扱所設置		
									七尾県を廃し射水郡は	新川県を移管。		

										明治
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	六
一六	一五	一四	一三	一二	一〇	九	八	七	甲戌	癸酉
癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	乙丑	丙子	乙亥	甲戌	一八七三
一八八三	一八八二	一八八一	一八八〇	一八七八	一八七九	一八七六	一八七五	一八七四	一月、民撰議院設立建 白書提出。	徵兵令。地租改正条例 發布。バツタン装置を フランスより移入。
越中一円が富山県とな	日本銀行開業。	国会開設の詔勅下る。	府県会開かれる。コレ ラ流行。	天皇北陸巡幸。 役所を石動町に設置。	西下町曳山の堆墨彫刻(現在左右のもの) 新調、曳山腰廻りの大きさも改修。 神明社の明細帳を調進。「和氣之清磨振 幣」絵額奉納。	神仏合併の布教禁止。	神明社に「算題額面」奉納される。	東上町曳山車を大八仕立てに改造、川原 町への庵巡行、今町、中野下町への曳山 庵の巡行始まる。	春祭が五月一五日に決定。画工山田金次 郎の「伊賀越道中双六」絵額が神明社へ 奉納。	城端祭礼日変更。春祭を五月、秋祭を九 月とし、春祭に曳山・庵を練廻すことと なり、曳山順番も改正。東上町寿老像の 衣裳新調。
西上町恵美須の胴型再調。	一〇代治五右衛門没、七八才 七月一六日、笠原研寿東京帝	善徳寺内に小学校創設。その 頃、善徳寺一八世宝香院勝道 入寺。	善徳寺を城端別院と称する。 この年、笠原研寿東本願寺よ り英國に留学を命ぜられる。 石動警察署城端分署を設置。 金沢博物館へ治五右衛門蔵絵 を出陳。	小学校校舎が野下町に落成。 城端町は新川郡第二五大区の 区会所所在地となる。	城端町は新川郡第二五大区の 区会所所在地となる。					

城端曳山史年表

同 二九	同 二八	同 二七	同 二六	同 二五	同 二四	同 二三	同 二二	同 二一	同 二〇	同 一九	同 一八	明治 一七
丙申	乙未	甲午	癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑	戊子	丁亥	丙戌	乙酉	甲申
一八九六	一八九五	一八九四	一八九三	一八九二	一八九一	一八九〇	一八八九	一八八八	一八八七	一八八六	一八八五	一八八四
郡の分離廢置を実施。	「文学界」創刊。 七月、日清戦争勃発。 四月、下関条約調印。	東上町庵修理、傘鉢新調。 「三六歌仙図」押絵額奉納。	第一回衆議院議員選挙	大津事件。	市制、町村制実施。	帝國議会開く。	大日本帝国憲法公布。	砺波郡役所出町へ移転	枢密院設置。	学校令發布。	内閣制度制定。	区町村会法改正。
西上町庵修理、傘鉢新調。 西下町曳山屋	東上町曳山人足用ハッピ新調。 神明社へ	八月、町長に齊藤龍一郎就任 城端生絹組設立。	八月、町長に斎藤龍一郎就任 生絹組改組。砺波銀行設立。 公設の消防組設立。	七月、町長に荒木文平就任。 町長に栗山半藏就任。	出丸町一九戸焼く。善徳寺経 蔵上棟式。	城端町町会議員選挙。五月、 町長に栗山半藏就任。	出丸町庵屋台修理のため寄付金を集め始 める。東上町祭礼用提灯新調。	米価騰貴のため曳山は出さず、庵のみ巡 回。	西下町庵屋台新調。	神明社へ和歌短冊額奉納。東上町曳山の 地山の幕新調。	大工町庵引新調。東上町庵前立下の重 修理、庵石垣新調。	神明社に素詔奉納額。
善徳寺虫干法会始まる。七月	八月、町長に上田義男就任。その頃 バッタン機導入。	八月、町長に齊藤龍一郎就任 城端生絹組設立。	八月、町長に齊藤龍一郎就任 生絹組改組。砺波銀行設立。 公設の消防組設立。	七月、町長に荒木文平就任。 町長に栗山半藏就任。	出丸町一九戸焼く。善徳寺経 蔵上棟式。	城端町町会議員選挙。五月、 町長に栗山半藏就任。	出丸町庵屋台修理のため寄付金を集め始 める。東上町祭礼用提灯新調。	米価騰貴のため曳山は出さず、庵のみ巡 回。	西下町庵屋台新調。	神明社へ和歌短冊額奉納額。	西上町恵美須装束新調。出丸町庵一部新 調。	る。初代県令国重正文 官選戸長制度となる。

城端曳山史年表

同	同	同	同	同	同	同	同	明治三〇	
三八	三七	三六	三五	三四	三三	三一	三一	丁酉	
乙巳	甲辰	癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥	戊戌	一八九七	
一九〇五	一九〇四	一九〇三	一九〇二	一九〇一	一九〇〇	一八九九	一八九八	中新川、永見、東砺波 西砺波の各郡を新設。 「ホトトギス」創刊。	
九月、ポーツマス条約	岩井藤三郎県議当選。 二月、日露戦争始まる	大工町曳山修理。大工町庵丸窓彫刻二枚 火。能美村が北野、蓑谷両村に分割。	隈板内閣成立。城端大 敦賀、富山間鉄道開通 七月荒木文平県議當選	東下町曳山大火により焼失。曳山祭中止。 大工町曳山天衣裳新調。出丸町庵修復起 工、彫刻の欄間と重出来上る。大工町人 形胴新調。	東下町大黒天衣裳新調。出丸町庵修復起 工、彫刻の欄間と重出来上る。大工町人 形胴新調。	大工町山蔵秋葉神社前に竣工。東上町曳 山の地山幕出来。東上町金鉢新調。	不景気により緊縮して曳山を出す。 大工町人形胴修繕完成。東下町曳山人足 二人。庵人足四人、人足賃三五錢、洒 三斗四升。	大工町山蔵秋葉神社前に竣工。東上町曳 山の地山幕出来。東上町金鉢新調。	東下町曳山修理。大工町庵丸窓彫刻二枚 火。能美村が北野、蓑谷両村に分割。 隈板内閣成立。城端大 敦賀、富山間鉄道開通 七月荒木文平県議當選
曳山祭中止。神輿巡幸も取止め る。	東上町庵天井の表具修復。 飾り山だけで曳山は出さず。西上町山藏 新築のため年間一〇〇円以上積立を始め	絹織物共同販売所設立。一二 月町長に大岡小兵衛就任。	一〇月一九日西上町大火、約 六〇戸焼失。	一〇月一九日西上町大火、約 六〇戸焼失。	一月、町長に岡部長左衛門。 四月一五日大火、焼失家屋二 八戸、三三四棟。	一月、町長に岡部長左衛門。 四月一五日大火、焼失家屋二 八戸、三三四棟。	一〇月城端駅開業。野村銀行 設立。	根改修・警察分署竣工式に庵屋台を出し て祝賀。	
同	同	同	同	同	同	同	同	町長に松本才喜就任。 警察分署廻舍竣工。一月、	

明治三九 丙午 一九〇六	三月、鉄道国有法發布	大工町曳山新調。出丸町曳山車新調。東下町傘鉢頂花・小槌箱新調。
同四〇 丁未 一九〇七	富山に歩兵三二旅団・六九連隊を新設。九月岡部長左衛門県議當選	大工町曳山車新調。曳山修理。大工町曳山前部彫刻出来。出丸町曳山車塗装。その頃西下町曳山車新調。天神千年祭に傘鉢参加。
同四一 戊申 一九〇八	東宮殿下福野町へ行啓	西下町曳山の屋根塗上げ。大工町庵屋台新調。東上町曳山金具新調・補足。
同四二 己酉 一九〇九	日韓併合。国定教科書變る。北野村大火。	西上町山藏買入れる。東下町庵屋台修理
同四三 庚戌 一九一〇	第二次條約改正(関税自主権回復)	出丸町梯子乗人形・笛吹唐童子衣裳新調からくり復活。
大正元 壬子 一九一二	明治四五年七月三〇日以降、大正元年となる	西上町曳山修理、曳山屋根張替。東下町曳山脇人形収納箱作成。
同四四 辛亥 一九一二		東上町庵屋台水引幕新調(正絹縮緬紫地波鶴模様)。出丸町庵屋台の重新調。
同四五 壬寅 一九一三		西下町曳山塗上げ、曳山後屏「竹に鶴」出来。出丸町曳山後屏彫刻「司馬温公」出来。東上町曳山腰組・腰彫作成。二重屋根を増補。西上町曳山二重離台金箔塗上げ。五月の神明社大祭に初めて奉幣使参詣。出丸町の古い庵屋台を津沢へ売却諒闇のため曳山は出さず。
同四六 癸卯 一九一三		立野ヶ原廠舍竣工。羽二重と紺の製織導入。一二月町長に岡部長左衛門が就任。
同四七 甲辰 一九一四		城端神明社神饌幣帛供進神社に指定。城端神明社敬神会設立。六月柳田国男来町。西新田町火事、一〇戸焼失。
同四八 乙巳 一九一五		城端織物組合設立。
同四九 丙午 一九一六		城端へ電話導入。力織機導入
同五〇 丁未 一九一七		一二月町長に岡部長左衛門。俳画家富田溪仙来町。
同五二 戊申 一九一八		俳人河東碧梧桐来町。神明社境内に忠靈碑竣工。済美青年会結成。
同五三 己酉 一九一九		
同五四 庚戌 一九二〇		
同五五 辛亥 一九二一		
同五六 壬子 一九二二		
同五七 癸丑 一九二三		
同五八 甲辰 一九二四		
同五九 乙巳 一九二五		
同六〇 丙午 一九二六		
同六一 丁未 一九二七		
同六二 戊申 一九二八		
同六三 己酉 一九二九		
同六四 庚戌 一九三〇		
同六五 辛亥 一九三一		
同六六 壬子 一九三二		
同六七 癸丑 一九三三		
同六八 甲辰 一九三四		
同六九 乙巳 一九三五		
同七〇 丙午 一九三六		
同七一 丁未 一九三七		
同七二 戊申 一九三八		
同七三 己酉 一九三九		
同七四 庚戌 一九四〇		
同七五 辛亥 一九四一		
同七六 壬子 一九四二		
同七七 癸丑 一九四三		
同七八 甲辰 一九四四		
同七九 乙巳 一九四五		
同八〇 丙午 一九四五		
同八一 丁未 一九四五		
同八二 戊申 一九四五		
同八三 己酉 一九四五		
同八四 庚戌 一九四五		
同八五 辛亥 一九四五		
同八六 壬子 一九四五		
同八七 癸丑 一九四五		
同八八 甲辰 一九四五		
同八九 乙巳 一九四五		
同九〇 丙午 一九四五		
同九一 丁未 一九四五		
同九二 戊申 一九四五		
同九三 己酉 一九四五		
同九四 庚戌 一九四五		
同九五 辛亥 一九四五		
同九六 壬子 一九四五		
同九七 癸丑 一九四五		
同九八 甲辰 一九四五		
同九九 乙巳 一九四五		
同一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一 丁未 一九四五		
同一〇二 戊申 一九四五		
同一〇三 己酉 一九四五		
同一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇六 壬子 一九四五		
同一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇 丙午 一九四五		
同一〇一一 丁未 一九四五		
同一〇一二 戊申 一九四五		
同一〇三〇 己酉 一九四五		
同一〇四〇 庚戌 一九四五		
同一〇五〇 辛亥 一九四五		
同一〇六〇 壬子 一九四五		
同一〇七〇 癸丑 一九四五		
同一〇八〇 甲辰 一九四五		
同一〇九〇 乙巳 一九四五		
同一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇九 乙巳 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇〇 丙午 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一 丁未 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇二 戊申 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇三 己酉 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇四 庚戌 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇五 辛亥 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇六 壬子 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇七 癸丑 一九四五		
同一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇一〇八 甲辰 一九四五		

同	同	同	同	同	同	大正
八	七	六	五	四	三	一九一四
己未	戊午	丁巳	丙辰	乙卯	甲寅	道
一九一九	一九一八	一九一七	一九一六	一九一五	天皇即位大典祝賀会。 俳誌「海紅」発刊。 九月、宮岡幸次郎、石 村正友県議に当選。	第一次世界大戦勃発。
ベルサイユ条約調印。	シベリア出兵。米騒動	金輸出禁止。石井・ラ ンシング協定。	工場法を施行。	西上町曳山修理、地山の柱取替一〇本。 東下町曳山修理、地山の柱取替一〇本。 西上町曳山の水波彫刻新調するも使用せ ず。西上町庵屋台水引幕新調。神明社に 石燈籠。	西上町庵座敷用欄間五六枚新調。 庵屋台新調完了。西上町曳山修理。西下 町庵重の欄間出来。出丸町曳山改修起工 出丸町への曳山進入問題起る。東下町 曳山大彫刻「雲に鳳凰」及び「唐子遊び」 の腰欄間取付け。	西上町庵座敷用欄間五六枚新調。 庵屋台新調完了。西上町曳山修理。西下 町庵重の欄間出来。出丸町曳山改修起工 出丸町への曳山進入問題起る。東下町 曳山大彫刻「雲に鳳凰」及び「唐子遊び」 の腰欄間取付け。
神明社絵馬堂雪のため崩壊。大工町秋葉 神社前の山蔵を坂場の現在地に移し、解 体せずに収納できるようになる。出丸町 曳山塗箔加工。	西下町曳山腰廻り。高さ改修、彫刻取付 け。西下町龜鉢新調。出丸町曳山「唐子」 「水波」の彫刻出来。西上町の古い庵屋 台を出町川原町（現在の砺波市中央町） へ売却。	西下町曳山腰廻り。高さ改修、彫刻取付 け。西下町龜鉢新調。出丸町曳山「唐子」 「水波」の彫刻出来。西上町の古い庵屋 台を出町川原町（現在の砺波市中央町） へ売却。	西上町庵座敷用欄間五六枚新調。 庵屋台新調完了。西上町曳山修理。西下 町庵重の欄間出来。出丸町曳山改修起工 出丸町への曳山進入問題起る。東下町 曳山大彫刻「雲に鳳凰」及び「唐子遊び」 の腰欄間取付け。	西上町庵座敷用欄間五六枚新調。 庵屋台新調完了。西上町曳山修理。西下 町庵重の欄間出来。出丸町曳山改修起工 出丸町への曳山進入問題起る。東下町 曳山大彫刻「雲に鳳凰」及び「唐子遊び」 の腰欄間取付け。	西上町庵座敷用欄間五六枚新調。 庵屋台新調完了。西上町曳山修理。西下 町庵重の欄間出来。出丸町曳山改修起工 出丸町への曳山進入問題起る。東下町 曳山大彫刻「雲に鳳凰」及び「唐子遊び」 の腰欄間取付け。	西上町庵座敷用欄間五六枚新調。 庵屋台新調完了。西上町曳山修理。西下 町庵重の欄間出来。出丸町曳山改修起工 出丸町への曳山進入問題起る。東下町 曳山大彫刻「雲に鳳凰」及び「唐子遊び」 の腰欄間取付け。
一二月、町長に荒木文平就任	「城端商工時報」発刊。城端機 業・越中紡織・城東機業・城 端織物の各株式会社設立。筏 スキークラブ設立。	四月、城端小学校新校舎落成 五月二十四日、閑院宮殿下来町 西上町火事、七戸焼失。	城端町に電燈導入。 二月、町長に矢部豊吉就任。 大谷貞子死去、二五才。	城端町に電燈導入。 二月、町長に矢部豊吉就任。 大谷貞子死去、二五才。	城端町に電燈導入。 二月、町長に矢部豊吉就任。 大谷貞子死去、二五才。	城端町に電燈導入。 二月、町長に矢部豊吉就任。 大谷貞子死去、二五才。

同	同	同	同	大正九
一四	一二	一一	一〇	庚申
乙丑	甲子	癸亥	壬戌	一九二〇
一九二五	一九二四	一九二三	一九二二	第一回国勢調査実施。
治安維持法、普通選舉 法公布。二月九日、五 ヶ山道路起工式。	第二次護憲運動起こる 北陸大演習に攝政宮來 県。	関東大震災	原首相、東京駅で暗殺 さる。ワシントン会議	東下町曳山車改修。神明社に狛犬出来。 越中絹織株式会社出火全焼。
大工町曳山の両腰及び後部の彫刻出来。 出丸町金鉢供の上下新調。	西下町堯王像の衣裳新調。西上町曳山屋 根一部修理、神饌用大皿新調。東下町庵 屋台修理壁板四枚に彫刻。東上町曳山四 本柱塗替、曳山車に金輪入替。神明社の 絵馬殿再建。	大工町曳山の両腰及び後部の彫刻出来。 出丸町金鉢供の上下新調。	海軍軍縮条約調印。	東下町曳山に唐子彫刻出来。出丸町曳山 の唐子彫刻・水波・鷺彫刻に塗箔彩色。 東上町曳山の地山巴紋額新調。曳山腰彫 の波・鶴を塗上げ。東上町庵屋台の重・ 欄間新調。東上町金鉢の「鶴」に塗箔。
「城端時報」発刊。城端別院 で聖徳太子千三百回忌大法要 町立幼児託児所を別院詰所で 開設。東新田稻荷社遷宮式。	「城端時報」発刊。城端別院 で聖徳太子千三百回忌大法要 町立幼児託児所を別院詰所で 開設。東新田稻荷社遷宮式。	二月、町長に鍋田祥平就任。	城端町立平和記念図書館開設	青年会に救護班組織。三月、 東下町曳山車改修。神明社に狛犬出来。 越中絹織株式会社出火全焼。
中塚一碧楼初めて来町・俳誌 「地獄谷」発刊。南山田村野 口地内で繩文式土器発掘。む ぎや新声会発足。				

昭和元年	昭和丙寅	昭和一九二六年	大正一五年二月二十五日以降昭和となる。
同	同	同	同
八癸酉	七壬申	六辛未	五庚午
一九三三	一九三一	一九三〇	一九二九
国際連盟脱退。	上海事件、五一五事件起ころる。	金解禁実施。	世界経済恐慌起ころる。
大工町関羽、周倉像衣裳新調。神明桜献	満州事変起ころる。	東下宝槌会、金沢放送局より城端の夕と題して庵唄「五月雨」を録音放送。神明社へ大歌舞伎絵額奉納される。	大工町庵の水引幕新調。出丸町への曳山進入問題再燃、道路閉鎖事件起ころる。
城端小学校雨天体操場落成。	九月、町長に大岡小兵衛就任	四月、町長に宮岡周三郎就任 一月一〇日、西村太冲正五位贈らる。一二月、町長に大岡小兵衛就任。	五月、町長に宮岡周三郎就任 二月五日、東久邇宮殿下來町 新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行ふ。 狂言保存会生まる。
		五月、町長に宮岡周三郎就任 二月五日、東久邇宮殿下來町 新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行ふ。 狂言保存会生まる。	五月、町長に宮岡周三郎就任 二月五日、東久邇宮殿下來町 新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行ふ。 狂言保存会生まる。
		五月、町長に宮岡周三郎就任 二月五日、東久邇宮殿下來町 新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行ふ。 狂言保存会生まる。	五月、町長に宮岡周三郎就任 二月五日、東久邇宮殿下來町 新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行ふ。 狂言保存会生まる。
		五月、町長に宮岡周三郎就任 二月五日、東久邇宮殿下來町 新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行ふ。 狂言保存会生まる。	五月、町長に宮岡周三郎就任 二月五日、東久邇宮殿下來町 新調。西上町庵屋台提灯に豆電球による点灯を行ふ。 狂言保存会生まる。

昭和九甲戌	一九三四年九月、室戸台風。	出丸町布袋像、旗持唐童子衣裳、南天寿の旗、庵屋台の重、水引幕新調。西上町山藏戸前改築。
同一〇乙亥	一九三五年富山放送局開局。城端五ヶ山バス開通。	東下町庵屋台の欄間一〇枚新調。西上町腰板（木瓜形中板）堆朱塗出来。
同一一丙子	一九三六年一二・二六事件起ころる。	五月、城端祭礼映画撮影。
同一二丁丑	一九三七年日中戦争勃発。	四月、城端別院大法要・大谷光暢法主来町。善徳婦人会発足。西新田町火事、五戸類焼。
同一三戊寅	一九三八年国家総動員法公布。	四月一六日、城端橋竣工。神明社に村井辰夫作の随神像出来。
同一四己卯	一九三九年第二次世界大戦始まる。	一月、町長に清水与八就任。各工場で産業報国会結成。警防団発足。
同一五庚辰	一九四〇年日独伊三国同盟締結。紀元二千六百年祝賀式	県下の織物工業組合を統合。織物組合飛行機献納。一月町長に西川栄一就任。企業整備、統制経済体制を強化。
同一六辛巳	一九四一年太平洋戦争勃発。	飾り山二日間。浦安の舞始まる。
同一七壬午	一九四二年ミッドウェー海戦。大詔奉戴日制定。アツツ島玉碎。北陸銀行発足。	飾り山のみ。神明社参道に石灯籠建つ。
同一八癸未	一九四三年	曳山祭中止。神輿渡御もなし。

昭和一九	甲申	東条内閣總辭職。
同二〇	乙酉	ボツダム宣言受諾。
同二一	丙戌	天皇人間宣言。日本国憲法公布。
同二二	丁亥	一九四六年五月に郷社昇格、七月に慶賀祭。
同二三	戊子	日本国憲法施行。六三四年制の新学制実施。
同二四	己丑	新祝祭日を決定。
同二五	庚寅	法隆寺金堂炎上。
同二六	辛卯	朝鮮動乱勃発。ジエーン台風の被害。
同二七	壬辰	サンフランシスコ講和會議。四月、黒川義明県議に当選。
同二八	癸巳	平和条約発効。
同二九	甲午	一九五四年五月、台風一三号通過で県下大被害。
一九五四	一九五三	日米相互防衛援助協定
西下町曳山地山の彫刻幕板出来、車輪台修理、山藏敷地譲渡。	東上町寿老像御面像修理。東下町大黒天像輪修理、山藏敷地譲渡。	城端神明社、五月に郷社昇格、七月に慶賀祭。
出丸町曳山金具新調。	南砺厚生病院設立。	一月一八日、国民体育大会スキー予選大会を立野ヶ原で開く。
西下町曳山車輪台新調。	城端町役場庁舎、大工町に建総塗仕上、庵屋台修理、前格子新調。	四月、町長に天富直次。
台風一三号通過で県下	四月、町長に天富直次當選。	五月、麦屋祭始まる。この年省営城端バス開通。
大被害。	設。	第一回城端区域町村議員協議会を上平村で開く。
日米相互防衛援助協定	五月、町村合併、町長に天富直次就任。	桜ヶ池の竣工式挙行。

							昭和三〇
同	三八	癸卯	一九六三	記録的豪雪。黒四ダム 富山空港完成。	一〇月	四月、町簡易水道完工。	一部改修。東上町曳山の腰、車軸台改 修。
同	三七	壬寅	一九六二	西上町恵比須像素袍及桐箱新調。	東下町曳山の芯木を準備。	東下町曳山の芯木を準備。	東下町曳山の芯木を準備。
同	三六	辛丑	一九六〇	西上町簡易水道工事のため曳山練廻し中止。東 下町山藏移転改築工事完成。大工町笛四 本新調。	五月、別院開祖七百回忌法要	五月、別院開祖七百回忌法要	五月、別院開祖七百回忌法要
同	三四	己亥	一九五九	東下町曳山の芯木完成。	三月、別院開祖七百回忌法要	三月、別院開祖七百回忌法要	三月、別院開祖七百回忌法要
同	三五	庚子	一九五六	大黒天像下着新調。東上町庵屋台水引幕 新調。	一月第一回県体スキー大会	一月第一回県体スキー大会	一月第一回県体スキー大会
同	三四	辛丑	一九五八	東下町曳山の唐子彫刻彩色、 台風。松村謙三訪中。	九月、「城端町史」刊行。一一 月、城端開町四〇〇年祭。	九月、「城端町史」刊行。一一 月、城端開町四〇〇年祭。	九月、「城端町史」刊行。一一 月、城端開町四〇〇年祭。
同	三三	壬寅	一九五七	日本經濟“神武景氣” で開催。N H K 富山テレビ放送開始。	西上町白木造庵屋台塗上げ四月に完了、 庵水引幕、先囃子台新調。東下町曳山屋 根張替。	西上町白木造庵屋台塗上げ四月に完了、 庵水引幕、先囃子台新調。東下町曳山屋 根張替。	西上町白木造庵屋台塗上げ四月に完了、 庵水引幕、先囃子台新調。東下町曳山屋 根張替。
同	三二	癸卯	一九五五	日本經濟“神武景氣” となる。	西上町白木造庵屋台塗上げ四月に完了、 庵水引幕、先囃子台新調。東下町曳山屋 根張替。	西上町白木造庵屋台塗上げ四月に完了、 庵水引幕、先囃子台新調。東下町曳山屋 根張替。	西上町白木造庵屋台塗上げ四月に完了、 庵水引幕、先囃子台新調。東下町曳山屋 根張替。
同	三一	乙未	一九五五	日本、国連加盟。魚津に大火 選。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体 して塗上げを始める。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体 して塗上げを始める。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体 して塗上げを始める。
同	三〇	昭和三〇	一九五五	四月、山田伊作県議当 選。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体 して塗上げを始める。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体 して塗上げを始める。	西上町、五月より白木造の庵屋台を解体 して塗上げを始める。

昭和三九	甲辰	一九六四	山田伊作県議当選。	この年より春の祭礼を五月二五日に変更。	西下町大黒天像左足改修。西下町山宿用神社幕新調。	上町恵比須像紺袴新調。西下町山宿用神社幕新調。	東海道新幹線開通。東京オリンピック開催。
同四五	同四〇	同四一	同四二	同四三	同四四	同四五	同五
庚戌	己酉	戊申	丁未	丙午	乙巳	甲辰	
一九七〇	一九六九	一九六八	一九六七	一九六六	一九六五	一九六四	昭和三九
調整始まる。	小笠原復帰。日中覚書貿易始まる。富山新港開港。公害条例制定。	天皇・皇后両陛下行幸	西下町恵比須像装束新調。曳山祭写真コンクール開催。	西下町金鉢を改装。西上町の古恵比須像移転。	根張替、町内半纏新調。	曳山の順路大改革。出丸町金鉢水引幕新調。東上町永年勤続曳山人足表彰。	日韓条約調印。
万国博開催。米の生産	啓、砺波市頬成山で第二三回全国植樹祭。立山トンネル貫通。	新調。五月二六日、曳山・庵屋台天覧に浴す。	西下町恵比須像装束新調。曳山祭写真コンクール開催。	野村満花城より寄贈。東上町山藏を新築	上町庵屋台にゴム車取付。東下町屋台屋上町庵屋台にゴム車取付。東下町屋台屋	五月の曳山祭を城端町文化財に指定。東上町庵屋台にゴム車取付。東下町屋台屋上町庵屋台にゴム車取付。東下町屋台屋	「国民の祝日改正案」条件付可決。

城端曳山史年表

昭和五一 丙辰	東下町曳山天井、屋根裏金箔塗上げ、屋根張替。一二月、砺波市中央町より庵屋台（大正六年に西上町が譲渡したもの）
一九七六 丁巳	ロッキード事件問題化。 中国に政変。
一九七七 同 五二 丁巳	豪雪。日ソ漁業交渉難行。有珠山爆発。王選手ホームラン世界記録。
一九七八 同 五三 甲子	が城端町へ復帰。 一一月二八日曳山連合会、曳山史編纂委員会会員一同、美術工芸作家協会の共催で荒木和助一七〇〇年祭式典を挙行。 庵宿に由来書の立札を建てる。「城端曳山史」脱稿。
一九七八 同 五三 甲子	六月、町長に田嶋茂再選。 三月、善徳寺寺宝展を県民会館で開催。六月、麦屋筋新声会創立五〇周年記念「北陸民謡大会」を町社会体育館で開催。

参考文献

参考文献

日本の祭
古代研究・日本の年中行事
日本人形史

東洋の歴史

高岡御車山と日本の曳山
神と祭りと日本人
八王子の曳山祭

御觸書寛保集成

加賀藩土辞彙

金沢市史（大正一四年刊）

石川県の歴史

富山县史

富山県の曳山

高岡市史

魚津市史

新潟市史

坂	下	前	日	石	高	相	牧	伊	日	外	山	折	柳
井	出	田	置	井	柳	原	田	勢	野	山	田	比	
教育	積	育	良	真	悦			宗	丈	軍		德	兵
委員	與	德	謙	助	三	夫	茂	治	夫	治	夫	衛	男
會	著	著	著	著	編	著	著	編	著	編	著	著	

小矢部市
八尾町
福野町
井波町
福町
坂端町
城端町
城端神明社誌

治五右衛門と城端蔵絵

明治以降の城端の織物業

（富山史壇五五・五八・五九・六〇号）

砺城端時報

組中人々手前品々覚書帳（元禄六年）

南畠時事

荒木家文

出丸町文書

伊藤家文書

小原家文書

洲洲
崎崎
哲哲
二二
編編

このほか、山町六か町の所蔵文書を利用してもらつた。

城 端 祭

中川 秋羅 作曲

(1937.5.15)

前奏

はるのなごりかめいぶつまつりかざるやまやま
よまちにはえてきょうはうれしやよい一まつー
りーこよともーゆわれもゆかむあ
すーははれるよじょうはなーまつーり

三、

春を惜しむか
夜の曳山 戻りの庵
つるす提灯 ゆら／＼ゆれて
帰り囃子の 流れ行く
いつまでも 耳に聞ゆ
城端祭

二、

みこし鉾傘庵や曳山や
桐の花咲く街々めぐり
ああゆかしや篠笛の音色
唄に三絃にもつれ泣くよ
春の名残りか 城端祭

一、
春の名残りか名物祭
かざる曳山々々夜街に栄えて
今日はうれしや宵祭
来よ友よ 吾も行かむ
明日は晴れるよ城端祭

城 端 祭
野 村 満花城
中 川 昌 作 曲

曳山史編纂の経緯

曳山祭の特色

城端曳山祭の第一の特色は、神輿渡御の行列に獅子舞・劔鉾、それに八本の傘鉾などが三基の神輿を先導し、それぞれ六台の庵と曳山がこれに続くという江戸時代からの古い祭礼形式を現在も保持していることである。

特に傘鉾の行列は、氏子各町の神迎えの信仰を伝えるもので、富山県に現存する唯一の祭礼文化財・民俗資料として高く評価されている。また、曳山祭の成立過程から把握すると、第二の特色は、豊かな町人の経済力を背景として生まれた祭であるが、その成立の要因は享保年間の経済不況打開の願いからであったこと、第三には、大工・塗師・人形師などの高度な美術工芸技術が地元に存在していたことがあげられる。そして、見せる祭・聞かせる祭として祭礼を把えると、第四の特色は、曳山・人形・庵の美術工芸的価値、曳山車の軋り音や屋根を揺り傾かせて転回する勇壮さ、操り人形の軽妙な演技、提灯山と庵囃子が醸し出す夜祭の情緒の素晴らしさである。さらに第五には、庵屋台の格調高い祭囃子と庵唄で、若者たちが芸を競い合う祭として、他所には類をみない特色を持つている。

城端は善徳寺の門前町として、また六斎市の市場町として成立し、付近農村からの来住者の増加によつて発展した在郷町であった。五箇山との特殊な経済関係、年貢米を収納する御蔵や藩士の知行米を取扱う蔵宿の存在、今石動町奉行の支配する町方として近隣の福光・福野・井波などの宿方とは異なる取扱いを受けたことも、

このような特異な祭礼を成立させた要因と考えられる。

城端町民の曳山祭への誇りと愛着は、明治以降も継承され、さらに豪華な曳山祭を形成することになった。

そしてこれが、今日の曳山史編纂事業にも連なるのである。

曳山史編纂の気運

昭和二〇年に城端神明社の郷社昇格を記念して、洲崎哲二先生が「城端神明社誌」を編纂された。その中で曳山関係の史料も紹介され、曳山史解明の基礎がつくられた。

昭和二八年に、文化財の調査・選定・保護ならびに町史編纂事業の実施を目的として、城端町文化財保護委員会が発足した。二九年には、県文化財保護委員会に依頼して曳山祭の調査も行われ、曳山祭を県文化財の指定に申請しようとの協議もなされた。昭和三一年からは富山大学の坂井誠一先生に監修を委嘱して、本格的な町史編纂事業が開始された。その後の町史編纂過程では、各分野にわたる調査を急いだので、特に曳山祭についての組織的な調査を進めることができず、結局は洲崎先生の從来の研究調査の域に止まるを得なかつた。

「城端町史」が刊行された昭和三四五年は、高岡市史（上巻）や小杉町史も編纂され、これを境として各地で市町村史刊行の気運が高まつた。富山県西部では、昭和三八年に大島村史・氷見市史・高岡市史（中巻）、三九年に福野町史・新湊市史、四〇年に砺波市史が刊行された。続いて四四年に福岡町史・高岡市史（下巻）、四五六年に井波町史（上下巻）、四六年に小矢部市史（上下巻）・福光町史（上下巻）なども編纂された。

その間、富山県東部でも相ついで編纂事業が進められ、昭和四二年には八尾町史も刊行されている。すでに

八尾の曳山神事は三八年に県文化財民俗資料に指定され、当時の町長橋爪辰男氏は四〇年に「八尾曳山史」を出版された。このようなことが刺激にもなつて、「城端曳山史」の編纂を要望する声が高まつたのである。

曳山史編纂の歩み

昭和四八年二月の“町長と語る会”で、田嶋茂町長は「城端曳山史」の刊行を約束し、五月一〇日に曳山史編纂準備協議会が開かれ、直ちに編纂委員会が発足した。「城端町史」と同じく富山大学の坂井誠一教授に監修をお願いし、編纂方針も決定した。その大要は次の三点であった。

- (一) 曳山祭の成立・発展・継承の過程を、政治・経済・文化の背景と関連させて総合的に把握するとともに、曳山・庵・傘鉾などの特色・構造・制作事情などを調査し、その保存に役立てる。
- (二) 曳山祭の実態を把握し、その特殊性と民俗資料としての重要性を明確にするとともに、県文化財に指定申請のための資料とする。
- (三) 資料は、文献・記録・箱書・裏書きなどできるだけ広範囲に収集するとともに、古老の言い伝えや伝説なども無視しない。また、記述はなるべく平易な表現を行い、多数の人々に愛読されるものにする。

五月一四日・一五日の祭礼には、各町担当の委員によつて基本調査が行われ、引続き四九年・五〇年にも調査は継続された。その間、執筆・編集の作業を進めるために常任編纂委員を選任し、体裁はA5判、内容は三五〇頁前後、刊行は昭和五年五月、という方針を定めた。

執筆は、第一章を監修の坂井先生にお願いし、第二章以下は常任編纂委員全員で検討しながら記述すること

にした。特に第八章以下は、主に一四代治五右衛門小原白照氏が執筆を担当した。また、曳山・庵の構造図は米原金治郎、写真収集は松嶋外茂治、年表作成は梅本富成の各氏が分担した。しかし、記述作業を進める中で内容が著しく拡充したため、編集計画は大幅に修正せざるを得なくなつた。その結果、まず昭和五二年度に第一〇章までを上梓し、以下は続篇として次年度以降の事業とすることにした。

城端の誇る伝統のある曳山祭を、どのように継承し保存していくかは、今後の大きな課題であるが、この問題にも心を配りながら、続篇には“人形”や“庵屋台”的章などを収録し、さらに補足・訂正事項を追記して、各位の御期待に添いたいと存じます。今後とも一層の御鞭撻・御援助を賜わるようお願い致します。

細川 健太郎

城端曳山史編纂委員會

城端曳山史編纂委員會

同 同 同 同 委 同 同 同 同 同 常任委員 編集主任 監修 委員長

坂井誠一
細川健太郎
田嶋茂
小原白照
金田健治
梅本富成
坂田
居憲英直常則
安村松河米原金治郎
居田嶋合原金治郎
憲英直常則
一 一 重 則

資料提供
写真協力
協力団体
事務局

伊藤克巳 河合喜代志 岡部宇一 畑憲二 洲崎元丸
堀越秀一 富井義輝 西野孝雄 堀端和田安三
城端町文化財保護委員会 城端神明宮敬神会 城端町曳山連合会
城端町庵連合会 西井初郎 斎藤耕三 岩井正治

城端曳山史

昭和53年5月10日 印刷
昭和53年5月15日 発行

編纂 城端曳山史編纂委員会

発行 城端町
富山県東砺波郡城端町

監修 富山大学教授
文学博士
坂井誠一

印刷 牧印刷所





